

はじめから立派な 親はいない



昨夜、少子化、子育て支援、育児不安など、子育てをめぐる問題がさまざま指摘されています。次の世代を担う子どもへの健全な成長は、親だけでなく、すべての人々にとっての共通の課題でもあります。

今回は、子育て中の母親をとあして、この課題について考えてみたいと思います。

孤独な子育て

「お願いだから、お母さんを困らせないで！」

小林陽子さん（33歳）は思わず大きな声を出してしまいました。ささいなことでもぐずり始めた翔太くん（2歳）は、なかなか泣きやみません。叱つても仕方がないことは分かっていますが、気持ちが抑えら



れません。母親の大声を聞いて、翔太くんはビククリして泣きやみましたが、少し間を置いてさらに大きな声で泣き出しました。

陽子さんはハッと我に返り、「大きな声を出してごめんなさいね」と声をかけた



ものの、翔太くんの泣き声は止まりません。

* * *

夫の雄三ゆうぞうさんの転勤てんきんに伴い、この街に引越してきたのが一か月前。まったく初めての土地での子育ては、思った以上に大変なものでした。知った人が一人もいないなかで、誰だれとも話をすることなく、一日が過ぎていきます。翔太くんが昼寝ひるねをしているのを見計みはからって、以前に住んでいた土地の友だちに電話をするのがせめてもの息抜きいきぬきですが、電話を切った後は無性むじょうに寂しくさびなります。

二、三度、少し歩いたところにある公園に翔太くんを連れて行きましたが、子どもを遊ばせている母親たちはすでにグループもできており、子どもの年齢ねんれいも上



のようで、気後れして入っていくことが
できませんでした。結局、一日中マン
ションの部屋の中で、翔太くんの遊び相
手をするようになりました。

頭の中ではやりたいことが次々に浮か
んでくるのですが、子どもの世話をし
ていると、思ったように時間を取ることが
できません。子どもはとてかわいいの
ですが、なかなか寝付かないときなどは
なぜだか無性に腹が立つのです。

「いったい自分は何をしているのだろ
う。このままでいいのだろうか」

漠然とした不安を感じながら、毎日を
過ごしています。子育ては大切なことだ
と分かっているし、喜びを感じることも
少なくありません。それでも、いろいろ
したり、不安になったりすることがしば
しばありました。

雄三さんはどちらかと言えば育児に協
力的で、週末には子どもと遊んでくれた
りもするのですが、今は新しい職場に移つ
たばかりで、毎晩遅くにしか帰ってこら
れません。子育ての悩みを話しても、「大
変だろうけど頑張ってくれ」と言うばか
りで、仕事で疲れていることは分かっ
ているのですが、あまりにも他人事
のように聞こえて、悲しくなってきました。

子育ての不安

現在、日本では急速に少子化が進んでいます。若者の多くは、いつかは結婚して子どもを持ちたいと思っっています。しかし、その一方で、将来の経済的負担や子育ての心理的・肉体的負担を考えて、子どもを産み育てることに不安を感じている人たちも少なくありません。

周囲に援助してくれる人や相談できる人がいない場合、母親が孤立感や疲労感を抱いたり、育児に対する自信を失うということがよくあります。

若い人たちがどうすれば喜んで子ども



を産み育てることができるのか、また、周りの人が母親たちにどう手を差し伸べていけばよいのでしょうか。

* *

陽子さんは、育児雑誌やインターネット



トから子育てについての情報をいろいろと入手しました。しかし、情報が多すぎてかえって不安になってしまいます。『優しいお母さんでいたい』と思いつながら、それができない自分が嫌になり、いつそう落ち込んでしまいました。

そんなある日のこと、近くのパン屋さんに翔太くんを連れて行き、買い物をしていました。すると少し目を離したすきに翔太くんが並べられていたパンの一つに触っていました。それに気がついた陽子さんは、思わず「触っちゃだめって言ったでしょ！」と大きな声で叫んでしまいました。結局、そのパンもいつしよにトレイに載せてレジへと向かいました。お店のおばさんに謝りながら、つい愚痴をこぼしてしまいました。

「すみません。落ち着きがなく、なかなか言うことを聞いてくれなくって、困っています。ちゃんとしつけようとはしているんですが、なかなか思ったとおりにいなくて……」

そう自信なさそうに話す陽子さんに対して、成り行きを見ていたお婆さんは、

「大丈夫よ。子どもはちゃんと育つから心配しなくてもいいのよ」と笑いながら言ってくれました。何気なくかけられた言葉でしたが、陽子さんは、その言葉でずいぶん気が楽になりました。

そのような陽子さんの気持ちを観察したお婆さんは、「もしよかったら知人がやっている子育て支援サークルがあるから、ぜひ行ってみたら」と言って、連絡先を教えてくださいました。



自分だけが特別ではない

それはボランティアが運営する「トマト・サークル」という子育て支援サークルでした。不安な陽子さんは、恐る恐るサークルの責任者に連絡を取り、一週間後に行われる例会に参加することになりました。

心細い気持ちを抱きながらも、翔太くんを連れて会場のコミュニティセンターに出かけました。その日の予定は「おしゃべりサロン」ということで、すでに数人のお母さんが集まり、楽しそうに話をしていました。子どもたちは、隣の部屋でボランティアの女性が預かってくれました。ボランティアの多くは、このサーク

ルに参加して子育てに一段落が着いたお母さんたちでした。翔太くんを預けた陽子さんは、責任者の人から紹介してもらって、お母さんたちの輪に加わりました。最初は、ほかの人たちの話を黙って聞くばかりでしたが、気がつくと自分の子育ての悩みを夢中で話していました。

できるだけ褒めてあげようと思つているのに、つい大声を出して叱つてしまいい、そのたびに自己嫌悪を覚えるという話をする、多くのお母さんたちが「私もまったく同じ気持ちになったことがあるわ」と言ってくれました。ほかの人も多かれ少なかれ自分と同じような悩みや



不安を抱えていることが分かり、自分だけが特別ではないのだと気づいただけで、ずいぶん気が楽になりました。気がつくのとあつという間に二時間が過ぎていました。



「こんなにおしゃべりしたのは、本当に久しぶりです。みなさんありがとうございます。ありがとうございました。またよろしくお願いします」
お礼を言って部屋を出ると、待ちかねたように翔太くんが飛びついてきました。

周りが支える子育て

かつては子育てをする母親の周りには、祖父母や近所のおばさん、おじさんと

いった多くの大人がいて、何かのときには子どもの面倒めんどうを見たり、子育てについて相談に乗るといったことが普通に行われていました。ところが、核家族化が進み、地域の人々のつながりが弱くなるにつれて、母親が一人で子育てを引き受けることが多くなっています。周りに助けを求めたくてもそれができずに、一人で問題を抱かかえ込んで悩んでいるケースをよく耳にします。

最近では、こうした悩み苦しむ母親たちを支援しようという「子育て支援サー



クル」が各地で活動を展開しています。行政が主催しゅざいするものやボランティアグループによるものなどさまざまですが、子育てを終えた母親たちが中心となってサークルを運営し、地域の若い母親たちに勉強や交流の場を提供しています。母親たちにとっては、出会いや息抜きのあると同時に、子育てについて共に学ぶ機会となっています。運営は苦勞も多いうのですが、自分の子育ての体験を次の世代の人たちに伝えたいという思いが、活動の原動力となっています。

最初から立派な親はいない



翌月のサークルの集まりでは、リーダーを囲んでの勉強会が開かれました。リーダーは、自分自身の経験を交えながら、特に乳幼児期には母親のあり方が子どもに影響を与えること、子どもを育てていく過程で親も育つていくということが話されました。

陽子さんは、リーダーの話の中で、「最初から立派な親はいない」という言葉が強く印象に残りました。

「子どもが生まれたから、すぐに親になるわけではありません。子どもを育てていくなかで、親になっていくんですよ。私も子どもが生まれてすぐに、自分の子

育てに自信をなくしたことがありま
した。自分はいいお母さんになるんだと張
り切っていただけに、思いどおりになら
ないことばかりで、落ち込んだんです。
そのときにたまたま、このサークルの基
になったグループに誘ってくれた人がい
て、そこでずいぶん助けられました」

しっかりとしたリーダーにもそんな経
験があつたとは、陽子さんは思いもしま
せんでした。

「そんなきっかけで、このサークルとお
付き合いが始まって、ここまできまし
た。いろいろなお母さんたちと出会って
きましたけど、どの人も少しずつ親とし
て成長していくんですよ。」

みなさんのお母さんも、そのまたお母
さんも、いろいろと悩みながら子育てを



してきたはずですよ。一度お母さんに聞
いてみるといいですよ」

リーダーの笑顔に、自分の母親の顔が
重なったような気がしました。

案ずるより産むが易し

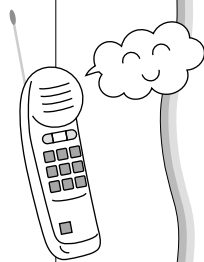
その夜、陽子さんは実家の母親に電話

をかけました。今日聞いてきた話をして、

「私のときにも、子育てで苦労したこと
があったの？」と聞いてみました。

母親は笑いながら、「そうね。あなたは
割に手がかからなかったほうだったけど
ね。それでも正人まさとが生まれたときに、陽
子はずいぶん甘えん坊になったのよ。覚
えているはずはないわよね」と答えまし
た。

聞くところによると、三歳のときに弟
の正人さんが生まれると、陽子さんはお
母さんにまとわりついて離れなくなった
そうです。わがままを言ったり、赤ちゃ



んにちよつかいを出したりと、それまで
になかった行動をとりだしたので、正人
くんの世話に追おわられる母親は、かなり
困ったということでした。

「さすがにあの時は、お父さんもあなた
の面倒を見てくれたわ。慣れないことを
やって大変だったのよ。それも少しの期
間だったけどね」

育児などまったく苦手にがてそうな父親が、
小さな自分を連れてうろうろしている姿
を思い浮かべると、知らず知らずのうち
に笑みがこぼれてきました

「みんな、そうやって大きくなっていく

のよ。でも何とかなるものよ。案ずるよ
り産むが易やすしつて、よくできた言葉よね」

電話から聞こえてくる母親の声をあらためてかみしめる陽子さんでした。

受け継いでいくもの

時代が変わるにつれて、子育ての方法も大きく変化しています。しかし、両親が中心となって愛情をかけて行っていくという子育ての原則は、いつの時代も変わりません。ただ、現実に孤立や不安を感じている母親たちには、周囲のサポートが必要になります。

一人の人間を育て上げるといふことは、確かに大変なことであるに違いありません。ただ「子育ては大変だ」というイメージばかりが先行していることも否定できません。ある調査によれば、子育

てを経験している人たちよりも、子ども
のいない独身者のほうが子育ては大変で
あるというイメージを強く持っている
という結果が出ています(※)。

それでも、子育てをした多くの人たちは、そのなかに喜びを見いだしています。子どもの笑顔に癒いやすされた経験は、ほとんどの親が持っているのではないのでしょうか。そのほかにも「家庭が明るくなる」「生活に張り合いができる」「自分の視野が広がった」と、子育てから得られる喜びは少なくありません。



——子育ての喜びやいのちを受け継ぐ大切さをきちんと次の世代に伝えていく。そして子育てに不安を感じる若い人々たちに対して、その不安な気持ちを周囲がきちんと受けとめて、安心して子どもを産み育てられるように、しっかりとサポートする——

これが、一人ひとりが日常の中でできる少子化対策であり、これから求められる子育て支援の一つではないでしょうか。

* * *

それからの陽子さんはサークルで知り

合った友だちと、サークル以外でも仲良く付き合うようになりました。いろいろと勉強や体験を重ねる過程で、子育てにも少しずつ余裕ができてきました。そして、翔太くんの無邪気な笑顔に、陽子さんも素直に笑顔でこたえられるようになりました。

今月もまた一人のお母さんが新しくサークルに入ってきました。不安げな彼女に向かつて「大丈夫よ。最初から立派な親はいないのよ」と声をかける陽子さんでした。